

称号及び氏名	博士（言語文化学）	清水 孝司
学位授与の日付	平成28年3月31日	
論文名	日本語の「のだ」文とそれに対応する 朝鮮（韓国）語の対照研究	
論文審査委員	主査	張 麟声
	副査	山東 功
	副査	西尾 純二
	副査	生越 直樹（東京大学）

要旨

【研究の目的】

本研究の目的は、日本語の「のだ」と朝鮮(韓国)語の「-ㄴ것이다(-n kesita)」の対照研究である。日本語の「のだ」と朝鮮(韓国)語の「-ㄴ것이다(-n kesita)」は、形態的に類似しており、おのおの一つの形式として独自の意味機能を表すようになったものである。形態的にも類似しており、表す意味も共通するところがあるため、両形式の使用原理の解明は容易と思われがちである。しかし、「のだ」の研究の量に比べ、「-ㄴ것이다(-n kesita)」の研究はまだ少なく、対照研究のためには朝鮮(韓国)語の原理を明らかにする必要がある。本研究では、いままで明らかにされてこなかった「-ㄴ것이다(-n kesita)」の使用原理を「書き換え」と定め、その原理から分析することによって、多くの用法の機能や使用領域が統一的に説明できることを示した。それにより、「のだ」との対応関係も明らかになり、「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」の共通点と相違点の全体像が明確になった。

【第2章 本稿の立場と先行研究】

本稿の立場というのは、「のだ」の使用条件が「先行文脈の説明」であるのに対して、「-ㄴ것이다(-n kesita)」の使用条件が「書き換え」であるということである。「-ㄴ것이다(-n kesita)」の「書き換え」というのは、相手の持っている誤った考えや情報に対して、そうではなくこうだと言って、考えの書き換えをさせる場合に「-ㄴ것이다(-n kesita)」が使用されるということである。それに対して、「のだ」は、状況も含めた「先行文脈の説明」という使用条件であるため、「-ㄴ것이다(-n kesita)」より広範囲で使用される。本稿では、「-ㄴ것이다(-n kesita)」が「のだ」の使用領域に包含されているのではなく、「のだ」が発動できない領域でも使用できることを示す。

つまり、両形式は、異なる使用条件で働いており、それゆえ、共に使用可能な領域と共に使用不可能な領域、さらに互いに一方のみ使用可能な領域が出て来るというのが本稿の立場である。「のだ」の使用領域の中に「-ㄴ것이다(-n kesita)」の使用領域が含まれているのではなく、互いに独立した使用領域を持っているということを検証する。

先行研究については、「のだ」の先行研究、「-ㄴ것이다(-n kesita)」の先行研究、「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」の対照研究の三つについて検討し、その優れた点と問題点について述べる。

【第3章 会話文における「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」】

この章では、会話文における「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」の対応関係について検証する。会話文と小説の地の文に分けて分析を行うのは、その振る舞いが異なるからであり、この章ではまず会話文における両形式の対応関係を検証してゆく。

「-ㄴ것이다(-n kesita)」が相手の持っている誤った情報を書き換える際に使用されるのに対して、「のだ」は情報の書き換えに関わりなく「先行文脈の説明」として使用されることを提示し、この原理によって両形式の対応関係が統一的に説明できることを検証する。

「-ㄴ것이다(-n kesita)」については、「書き換え」という原理から「書き換え対象が相手の場合」と「書き換え対象が自分の場合」に大きく分けて分析し、平叙文、疑問文、命令文、感嘆文についても統一的に説明できることを示す。

【第4章 小説の地の文における「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」】

この章では、小説の地の文における「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」の対応関係について検証する。会話文との違いを指摘しつつ、小説の地の文においても、会話文と同様に、「-ㄴ것이다(-n kesita)」が「書き換え」という原理から説明でき、「のだ」は情報の書き換えに関わりなく「先行文脈の説明」として使用されることを検証する。

会話文と同様に、「-ㄴ것이다(-n kesita)」については、「書き換え」という原理から「書き換え対象が相手の場合」と「書き換え対象が自分の場合」に分けて分析する。会話文と異なり、地の文には、疑問文や感嘆文や命令文がないので、平叙文についてのみ検証を行う。

【第5章 スコープの「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」】

この章では、スコープの「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」のずれについて検証する。ずれというのは、スコープの「のだ」が使われている文においても、「-ㄴ것이다(-n kesita)」が使われたり、使われなかったりしていることである。

両者のずれの原因が、「のだ」がスコープの「のだ」文の際に必須であるのに対して、「-ㄴ것이다(-n kesita)」が相手の誤解を解くか解かないかという「書き換え」の原理で使用されているためであることを検証する。

さらに、そのずれが、田野村(1988)で第一類とされている「(の)ではないか」と、それに該当する朝鮮(韓国)語の対応関係のずれにも関わっていることを検証する。

【第6章 「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」の全体像】

この章では、「-ㄴ것이다(-n kesita)」が「のだ」の使用領域内にとどまらず、「のだ」が使用できない領域においても「書き換え」の原理で使用されていることを検証する。具体的には、「ものだ」や「ことだ」の使用領域でも「-ㄴ것이다(-n kesita)」が「書き換え」の領域で使用されていることを示す。それにより、「のだ」より狭いとされてきた「-ㄴ것이다(-n kesita)」の使用領域が、ただ「のだ」の使用範囲内の一部を担っているだけではないということを明らかにする。

つまり、両形式が異なる使用条件で働いており、それゆえ、共に使用可能な領域と共に使用不可能な領域、さらに互いに一方のみ使用可能な領域が出てきていることを検証する。

また、「-ㄴ것이다(-n kesita)」が、スコープの「のだ」とムードの「のだ」の「書き換え」の領域で重なっていることを検証する。

【第7章 結論】

本研究では、今まで明らかにされてこなかった「-ㄴ것이다(-n kesita)」の使用原理を「書き換え」に定め、それにより様々な用法や使用領域が統一的に説明できることを示した。「のだ」については研究が進んでいたため、様々な資料から分析できるが、「-ㄴ것이다(-n kesita)」については、研究の歴史も浅く、まだ定まった原理が見出されていなかったのである。それが、対照研究をより困難にしていた。今回、「書き換え」という原理により、「-ㄴ것이다(-n kesita)」と「のだ」の対応関係の解明にある程度成功したように思われる。今後はより詳細な部分でこの原理が真に「-ㄴ것이다(-n kesita)」の中心的な原理であるのかを検証してゆきたい。また、本研究で得られた結果が他の個別言語研究や対照研究、そして習得研究の役に立つように検証を重ねてゆきたい。

学位論文審査結果の要旨

1 この論文の学術的意義

この論文の何よりも大きい学術的意義は、「のだ」に対応するとされる朝鮮（韓国）語の「-ㄴ것이다(-n kesita)」を綿密に記述したことにある。「のだ」については、専論も多い上に、野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』、名嶋義直(2007)『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—』といった著書の刊行も見る。一方、「のだ」に対応するとされる朝鮮（韓国）語の「-ㄴ것이다(-n kesita)」という重要な言語形式に関して、本格的な記述言語学的研究がなされているとは言いがたい。日本に留学してきた韓国人留学生や日本語教育の研究者による対照研究を通じた考察は一部に見られるが、「のだ」の原理を「-ㄴ것이다(-n kesita)」に当てはめて検討するという傾向が強く、「-ㄴ것이다(-n kesita)」自体に対する綿密な観察から、その使用原理に関する仮説を立てたのは、この論文が初めてとあってよい。

その結果、「-ㄴ것이다(-n kesita)」の使用原理として、今までのどの研究よりも説得力が高い「書き換え」という語用論的な概念を生み出した。そして、この角度から、用例を丁寧に検討することによって、「-ㄴ것이다(-n kesita)」が使えて、「のだ」が使えない現象を見つけ、学界で漠然と考えられていた「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」は、前者が後者を包む、いわゆる包含関係にあるという通説を覆し、両者は、一部の重なりを有しながら、それぞれ独自の使用領域を持つ「部分的に重なる類義関係」であることを明らかにした。

2 この論文の評価

この論文は、テーマの選定、研究の方法、先行研究の取り扱い、論述の展開、研究の結果のそれぞれの項目について、次のように評価できる。

テーマの選定：

日本国内の情報と言うまでもなく、韓国をはじめ、諸外国における朝鮮（韓国）語の研究事情を精査し、世界的に見て、記述的研究が十分ではない「-ㄴ것이다(-n kesita)」という語用論的形式を選定して、「のだ」との対照研究を行い、言語類型論にも、日本語教育や朝鮮（韓国）語教育にも寄与できる研究結果を生み出した。この点において、テーマの設定は極めて的確であると評価できる。

研究の方法：

記述言語学及び、「言語の記述的研究を助けるための対照研究」の方法を用いて、丁寧に

現象を観察し、記述を行った。朝鮮（韓国）語の用例に関しては、出自のあるもの、及び作例のいずれについても、複数人によるネイティブチェックを受け、用例として確実なものとしている。

先行研究の取り扱い：

日本国内の日本語学界、日本語教育学界、朝鮮（韓国）語学界にとどまらず、韓国の関連学界の先行研究についても、丁寧に調査収集し、批判的に生かされている。

論述の展開：

先行研究を丁寧に検討したうえで、会話文体と小説の地の文という2つの文体に分け、平叙文、疑問文、命令文、感動文という順序できめ細かい考察を行った。その考察結果に基づき、従来漠然と考えられていたスコープの「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」との包含関係について1章を設けて検討して、それとは大きく異なる新しい見解を提出したうえで、「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」の全体像を論じている。

研究結果：

- I. 「-ㄴ것이다(-n kesita)」の使用原理について、今までのどの研究の仮説より説得力が高い「書き換え」という語用論的な概念を作り上げた。
- II. 従来学界の方で漠然と考えられていた「のだ」と「-ㄴ것이다(-n kesita)」は前者が後者を包むという包含関係が事実と打ち合わないこと突き止め、両者は一部の重なりを有しながら、それぞれ独自の使用領域を持つ「部分的に重なる類義関係」であることを明らかにした。

3 審査委員会の結論

この論文は、堅実な記述言語学及び対照言語学的方法を用いて、豊富な用例を観察して、記述を行い、説得力の高い結論を導いている。

本審査委員会は、全員一致で、この論文が以下の人間社会学研究科の博士論文審査基準をすべて満たし、博士学位の取得にふさわしいものであると判断する。

- 1) 研究テーマが絞り込まれている。
- 2) 研究の方法論が明確である。
- 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。
- 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。
- 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

以上